

Title	讃岐高松石清尾山石塚の研究(梅原末治著)京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十二册
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.198(578)- 198(578)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0198">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0198</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

とを暗示して呉れる。(松本信廣)

### 讃岐高松石清尾山石塚の研究 (梅原末治著)

京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十二冊

高松市外右清尾山上にある一群の積石塚は、我國墓制上特異の一存在であるが、昭和六年京大考古學教室は、前後二回同地に至つて之を實測調査し、更に同七年帝室博物館に就てその中最も重要な猫塚出土の遺物を調査してもつて本報告を公刊されたのである。猫塚は、その形式著者の所謂双方中圓墳であり、圓墳の前後に方丘の突出したる珍しきタイプを備へてをる。既に非科學的なる發掘によつて破壊された跡なるも、中央に堅穴式大石室存しその兩側に八個の小石室の存在したことが推せられる。發見遺物は、大體土築の古式古墳と同時代に屬し、鏡鏝、小銅劍、銅鏃、筒形銅器、彌生式精巧土器等を出だしてをる。猫塚の外には圓形墳、前方後圓墳、方墳等あり、また割竹形の身に石枕を造附けた石棺一個を出だしてをる。是等の石塚は築成の上に著しい特色を持ち乍ら、外形並びに内容に於て、上代の盛土式古式墳と同似を示し、その營造もほぼ同時期に屬するらしい。我國古式墳の年代は從來副葬鏡鏝の年代から推定されてゐたが、鏡は支那からの舶載品でその自體に傳世の事實を考へしめる點があるから、之によつて遺跡の詳しい實年代を求めるとはなほ考慮す可きであり、今日では應神仁德朝を中心とした盛行期とそれに先立つ遺跡との別を大體求め得るにとゞまつてをる。猫塚の出土鏡も前後漢三國代のものであるが、之によつて或論者の如く該古墳が、前漢代か

ら三國代あたりと比定し得られるとは簡単に斷じ難く、單に猫塚が出土品中最古の鏡の年代から、その營造の上限が前漢代を廻らないことのみ斷言し得る。石塚中には稍々年代を古く廻らし得べき諸點を含んでゐることは誤りないが、單なる形式の同似を以てその遺跡のすべてを最盛期以前の造營とすることには問題があつて嚴密な意味からは古式古墳の行はれた時期を本石塚群の實年代の限界とするより外はない。またこの石塚は大陸系の積石塚と全然關係ない譯ではないが、然し外部の刺激は主要な原因でなく所在地附近の石に富む地理的條件がたま／＼積石塚といふ特殊の形式を生み出したものに外ならぬ。

以上此新著の中に表白された著者の所論は相不變周到適切である。圖文の模糊とした漢鏡に傳世による磨研を認め從來此種の出土品に遺跡年代推究の基準をおいたことを是正せんとされてゐることとは著者が同じく「傳世」の事實を支那遺物に於て認めつゝあるのと相對して極めて興味が深い。かゝる傳世品を墳墓中に葬る理由を人は怪しむかも知れないが、富は保存することによつてのみ尊ばれず或時は破壊施與されることによつて所有者の價値を増す伴葬は、この價値の破壊であり、之によつて當事者は、死者に富を贈與することとなり、その感謝報恩を豫期することが出来る。埋葬に際して殉死の様な巨大なる價値破壊が行はれる場合、傳世の寶と他の器物と共に地中に葬られることは少しも不思議はないのである。古代人の寶に對する考へは、未開人の心理に理解を持つ宗教社會學の目をとほして判じられねばならぬ。此處でも社會學と考古學とが將來手を組んで進めさうである。(松本信廣)